

近代・現代

産業革命後の欧米列強は、アジアへの進出を本格化させた。インドではイギリスが直接支配を始め、中国ではイギリス・フランスが清から諸種の利権を奪い、南下したロシアも領土を拡大した。イタリア・ドイツもイギリス・フランスのあとを追って植民地の獲得に乗り出し、アフリカ大陸やオスマン帝国・中国に向かった。アメリカも19世紀半ばに太平洋岸まで領域を拡大し、フィリピン・ハワイを獲得した。これらの動きは、帝国主義と呼ばれ、ついにはバルカン半島での紛争を機にヨーロッパ全土に第一次世界大戦を引き起こすことになった。

総力戦となった第一次世界大戦の中で、各国は、兵士の大量動員と熟練労働力の確保という両立の難しい問題に直面した。戦後、社会主義思想や労働運動が隆盛する要因はここにある。ソ連を排除したヴェルサイユ・ワシントン体制は世界恐慌を契機に崩壊し、それ以降は、国家の経済発展と安全保障をいかに追求するかという点での考え方の相違から、連合国と枢軸国とのあいだに第二次世界大戦が勃発した。

一方、日本では明治政府が、列強に範をとった近代化につとめ、憲法・軍隊・議会など、近代国家の指標となるしくみを20年ほどで整えた。日本は、日清戦争では台湾を、日露戦争では南満洲の権益を獲得し、韓国(朝鮮)を併合して帝国主義国家の一員となったが、中国における権益を守ろうとして第二次世界大戦に突入し、敗北を喫した。

第二次世界大戦後、独立を回復した日本は、民主主義と平和主義の基本方針のもとに国際社会に寄与しようと努力してきた。1970年代の2度にわたる石油危機を境に、第二次世界大戦後の国際社会は大きく変化し始めた。高度経済成長の結果アメリカにつぐ経済力をもつに至った日本は、冷戦の終了とソ連・東欧社会主義体制の崩壊、ヨーロッパ地域の統合、アジア諸国の民主化と経済発展、さらには自国中心主義の高まりと感染症の流行に直面し、国家や社会のあり方について考え直すことをせまられている。

	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000														
時代	江戸			明治				大正		昭和				平成																
政治	(幕末維新)			(自由民権)		(大陸進出)		(政党政治)		(軍部支配)		(占領期)		(安保体制)		(制)														
主要事項	太平洋の乱	ペリー来航	英・清間の天津条約	日米修好通商条約	南北戦争	大政奉還	ドイツ統一	西南戦争	廃藩置県	露土戦争	大日本帝国憲法	露仏同盟	日清戦争	北清事変	日露戦争	韓国併合	シベリア出兵	国際連盟成立	世界恐慌	満洲事変	日中戦争	大金洋戦争	日本国憲法	朝鮮戦争	サンフランシスコ平和条約	国際連台加盟	日韓基本条約	日中平和友好条約	バブル経済	東日本大震災
	帝国主義										第一次、第二次世界大戦						東西冷戦													
世界	朝鮮				大韓帝国				(日本領)				朝鮮民主主義人民共和国				大韓民国													
	清								中華民国				中華人民共和国(台湾)																	

近世から近代へ

欧米列強によるアジア進出の最中、幕府・朝廷・諸藩は対外的危機にこたえる新たな政治体制を模索した。それまで政治決定に関わらなかった者たちも政治参加や変革を求めて動き出した。幕末の動乱を通じて、彼らはどのような政治体制を求めたのだろうか。そして、なぜ幕府を滅亡させて新たな政府をつくる必要があったのだろうか。

5

1 開国と幕末の動乱

①18世紀後半から19世紀にかけて、幕府は内憂外患への対応に腐心し、諸藩の中には藩政改革によって実力をつけるものが現れた(→p.212)。新たな政治体制を考える学問・思想が生み出され(→p.214)、藩校・私塾を通じて人材が養成され、多様な議論や行動につながった(→p.215)。

内憂外患への対応

18世紀後半、イギリスで最初の産業革命が始まり、工業化の波はさらにヨーロッパ各国やアメリカにおよんだ。巨大な工業生産力と軍事力を備えた欧米諸国は、国外市場や原料供給地を求めて、競って植民地獲得に乗り出し、とくにアジアへの進出を本格化させた。

10

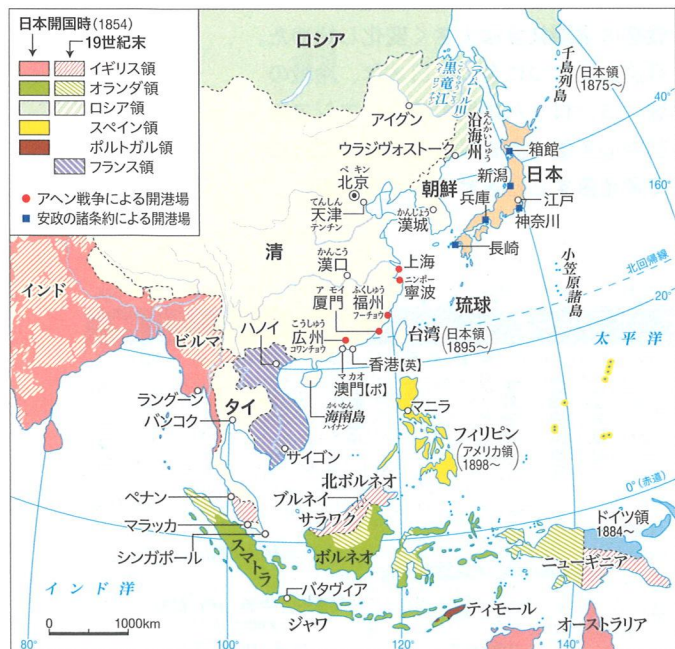
それまで、幕府は鎖国・攘夷を有力な対外方針として、海岸防備の強化もはかってきた。しかし、幕末の深刻な対外的危機により、開

国・和親を含めた幅広い議論が生じた。このことは、幕府自体に政治改革をうながすとともに、幕政に関わることがなかった大名や藩士たちが政治参加を要求し①、朝廷の政治的影響力も増大するなど、従来の政治体制を変革、解体する契機となった。また、開国にともない国内の経済に大きな影響が生じ、政治体制も不安定化したことにより、民衆の生活苦や社会不安が増大し、内憂への対処もより深刻な問題となった。幕末の動乱は、国内の諸勢力がこうした内憂外患の解決をはかろうとした模索の動きといえる。

15

20

25



列強のアジア進出

ペリー来航と対外方針の模索

清はアヘン戦争でイギリスに敗れ
南京条約を結び、上海など5

港の開港、香港島の割譲、貿易の自由化を認めさせられた。清の劣勢が日本に伝わると、幕府は1842(天保13)年、異国船打払令を緩和

していわゆる天保の薪水給与令を出し、漂着した外国船には燃料である薪や水・食料を与えることにした。それでも、幕府は従来の鎖国の方針を捨てたわけではなかった。1844(弘化元)年、オランダ国王が幕府に親書を送り、平和維持のため諸外国との通商関係を築くように勧告した。翌年、幕府はこれを拒絶してあくまでも鎖国体制を守ると

返書したが、その一方で、今後の対応を模索した^②。こうした中、1846(弘化3)年にアメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが浦賀に来航して開国を要求したが、やはり幕府は拒絶した。アメリカは、北太平洋を航海する清との貿易船や捕鯨船の寄港地として日本の開国を強く望んでいた。

1853(嘉永6)年4月に琉球王国の那覇に寄港したアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは、軍艦(「黒船」)4隻を率いて6月に浦賀沖に現れ、フィルモア大統領の国書を提出して日本に開国を求めた。幕府は、紛争を避けるために国書を受領し、回答を翌年に約してひとまず日本を去らせた。ついで7月には、ロシアの使節プチャーチンも長崎に来航して、開国と国境の画定を要求した。

ペリーは翌1854(安政元)年1月、7隻の艦隊を率いて再び浦賀に来航し、条約の締結を強硬にせまった。幕府はその威力に屈して3月に日米和親条約^③を結び、(1)アメリカ船が必要とする燃料や食料などを供給すること、(2)難破船やその乗組員を救助すること、(3)下田・箱館の2港を開いて

オランダ国王の開国勧告

謹んで古今の時勢を通考するに、天下の民ハ速ニ相親しむものにして、其勢ハ人力のよく防ぐ所に非ず。蒸気船を創製^①せるにより、以来各国相距ること遠くて猶近きに異ならず。斯の如く互に好を通ずる時に当りて、独国を鎖して万国と相親しまざるハ人の好ミする所にあらず。貴国歴代の法に異国の人と交を結ぶことを厳禁したまふハ、歐羅巴州にて遍く知る所なり。…是に殿下^②に丁寧に忠告する所なり。

(通航一覽編輯)

① 一八〇七文化四年、アメリカ人フルトンが実用化。
② 將軍のこと。十二代將軍家慶。

Q> アヘン戦争で清が敗れたことで、幕府の外交にはどのような影響があったのだろうか。

② 幕府は、1845(弘化2)年に対外政策の慎重な検討を求めて海防掛を設置し、1849(嘉永2)年には海防掛や三奉行のほか、江戸・長崎警護の諸大名や学問所の儒者たちにまで意見を求めた。

Q> 欧米の開国要求に対して、幕府や諸藩ではどのような議論がおこり、どのように対応しようとしたのだろうか。

③ この条約は、東海道の宿駅である神奈川の近くで結ばれたので神奈川条約ともいう。



ペリーの横浜上陸 1854(安政元)年2月、ペリーは横浜に上陸し、会見所へ向かった。威儀を正した500人の海兵隊と水兵が左右に整列し、日本側は会見所入口で旗・のぼりをもって迎えた。図はその様子を描いた石版画。

(横浜開港資料館蔵)

①アメリカ以外の国と結んだ条約において、日本がアメリカに与えた条件よりも有利な条件を認めた時は、アメリカにも自動的にその条件が認められるというもの。

②ペリーについてロシアのプチャーチンも再び長崎に来航し、下田で日露和親条約を結んだ。この条約で、下田・箱館のほか長崎を加えた3港を開き、国境については択捉島以南の島々は日本領(現在の北方領土)、得撫島以北の千島列島をロシア領とし、樺太(サハリン)は従来通り境界を定めないことなどが約定された。

③越前藩主松平慶永・薩摩藩主島津斉彬・宇和島藩主伊達宗城らの協力を得た。

領事の駐在を認めること、(4)アメリカに一方的な最恵国待遇①を与えることなどを取り決めた。ついで、幕府はイギリス・ロシア②・オランダとも類似の内容の和親条約を結んだ。これを「開国」というが、通商を認めなかったことから、薪水給与令と大差ないというところもあり、当時の人々がみな、鎖国を放棄したと考えたわけではない。

ペリー来航後、老中首座阿部正弘は、それまでの方針をかえて朝廷への報告をおこない、諸大名や幕臣にも意見を述べさせて、挙国的に対策を立てようとした。しかし、この措置は朝廷の権威を高め、諸大名の発言力も強めて、従来の幕政を転換させる契機となった。また幕府においても、人材を登用する③とともに、前水戸藩主徳川斉昭を幕政に参画させた。さらに国防を充実する必要から江戸湾に砲台(砲台)を築き、大船建造の禁を解き、貿易容認に向けて蘭学に通ずる堀田正睦を老中首座にすえた(安政の改革)。

開港とその影響

日米和親条約にもとづき1856(安政3)年来日した初代アメリカ総領事ハリスは、下田に駐在して通商条約の締結を強く求めた。ハリスとの交渉に当たった堀田正睦は、条約調印の勅許を求めたが、朝廷では攘夷の考えが強く、孝明天皇の勅許は得られなかった。

ところが1858(安政5)年、清が第2次アヘン戦争の結果として、イギリス・フランスと天津条約を結ぶと、ハリスはイギリス・フランスの脅威を説いて通商条約の調印を強くせまった。大老井伊直弼は勅

日米修好通商条約①

第三条 下田、箱館港の外、次にいふ所の場所を、左の期限より開くべし。

神奈川……西洋紀元千八百五十九年七月四日

長崎……同断

新潟……千八百六十年一月一日

兵庫……千八百六十三年一月一日

……神奈川港を開く後六ヶ月にして下田港は鎖すべし。此箇条の内に載たる各地は亞墨利加人に居留を許すべし。……双方の国人、品物を売買する事總て障りなく、其私方等に付ては日本役人これに立会はず。

第四条 総て国地に輸入輸出の品々、別冊の通、日本役所へ運上を納むべし。

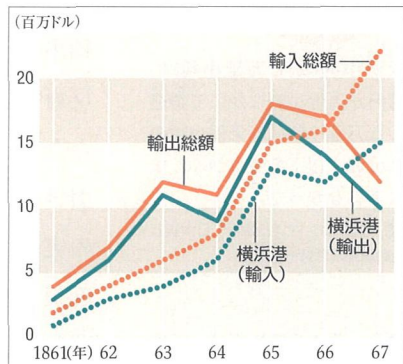
第六条 日本人に対し、法を犯せる亞墨利加人は、亞墨利加コンシユル裁断所にて吟味の上、亞墨利加の法度を以て罰すべし。亞墨利加人へ対し、法を犯したる日本人は、日本役人糺の上、日本の法度を以て罰すべし。

(大日本古文书 幕末外国関係文书)

①全一四条のうち第三条は自由貿易を規定し、第四条にみえる別冊「貿易章程」では関税自主権を欠き、第六条ではコンシユル(領事)の裁判権を認め(治外法権)、アメリカ人の犯罪については、日本側で裁判がおこなえない一方的なものであった。

輸出	5%	金銀貨幣・棹銅のほかのすべての日本産輸出品
	20%	下記以外のすべての品物
	35%	すべての蒸留酒・醸造酒
輸入	5%	船具・捕鯨具・塩漬食物・パン・パン粉・鳥獸・石炭・建築材・米・穀・蒸気器械・トタン・鉛・錫・生絹
	無税	金銀貨幣・金銀・当用の衣服・家財・非商用書籍

日米修好通商条約の貿易章程における関税率



輸出入額の変遷(石井孝「幕末貿易史の研究」より作成)

許を得られないまま、同年6月に日米修好通商条約の調印を断行した。

この条約には、(1)神奈川・長崎・箱館・新潟・兵庫の開港④と江戸・大坂の開市、(2)通商は自由貿易とすること、(3)開港場に居留地⑤を設け、一般外国人の国内旅行を禁じることなどが定められた。さらに、(4)アメリカに領事裁判権(治外法権)を認め、(5)日本の関税については日本に税率の決定権がなく、相互で協議して協定関税を定める(関税自主権の欠如)不平等条約であった。幕府はついで、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも類似の条約を結んだ(安政の五カ国条約)。

貿易は1859(安政6)年から横浜・長崎・箱館で始まった。輸出入品の取引は、居留地において外国商人と日本商人(売込商・引取商)とのあいだで、銀貨を用いておこなわれた。輸出入額は横浜が圧倒的に多く、アメリカで南北戦争がおきたこともあり、イギリスとの取引が一番多くなった。

日本からは、生糸・茶・蚕卵紙・海産物などの農水産物やその加工品が多く輸出され、毛織物・綿織物などの繊維工業製品や鉄砲・艦船などの軍需品が輸入された。貿易は大幅な輸出超過となり、それに

④実際には神奈川は交通が頻繁な宿駅であったため、近接した横浜にええられ、横浜開港後に下田は閉鎖された。1867(慶応3)年ようやく開港の勅許を得た兵庫も、実際には現在の神戸となった。新潟の開港は1868(明治元)年となった。

⑤条約の締結国が、外国人に一定地域に限定して居住・営業を許可した。

Q▶ 開国は政治や社会にどのような影響をおよぼしたのだろうか。



天保小判(左)と万延小判(右)
幕府が天保小判にかえて鑄造した万延小判は、天保小判の3分の1以下の金しかふくまれていなかった。

(左:縦5.6cm、右:縦3.6cm、日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵)

①金・銀の交換比率は、外国では1:15、日本では1:5と差があった。外国人は外国銀貨(洋銀)を日本にもち込んで日本の金貨を安く手に入れたため、10万両以上の金貨が海外に流出した。

②1860(万延元)年、ハリスの通訳であったオランダ人ヒュースケンが江戸で薩摩藩の浪士に殺され、さらに翌年、高輪東禅寺のイギリス仮公使館が水戸浪士の襲撃を受けた(東禅寺事件)。1862(文久2)年には、神奈川宿に近い生麦で、江戸から帰る途中の島津久光の行列を横切ったイギリス人が殺傷された(生麦事件)。この事件はのちに薩英戦争(→p.226)をまねく原因となった。同じ年の暮れには品川御殿山に建築中のイギリス公使館が長州藩の高杉晋作・井上馨・伊藤博文らに襲撃されて全焼した(イギリス公使館焼打ち事件)。

刺激されて物価が上昇するとともに、国内産業に大きな変化が現れた。輸出品の中心となった生糸の生産は拡大したが、一方では機械で生産された安価な綿織物の大量輸入が、農村で発達していた手紡や綿織物業を圧迫していった。

幕府は、物価高の抑制を理由に貿易の統制をはかり、1860(万延元)年、生糸・水油などの5品は、横浜直送を禁じて必ず江戸の間屋を経由して輸出するように命じた(五品江戸廻送令)。しかし、輸出向け商品を取り扱った在郷商人や商取引の自由を主張する列国の反対で効果は上がらなかった。また、日本と外国との金銀比価が違ったため、多量の金貨が海外に流出した①。幕府は金貨の品質を大幅に引き下げる改鑄(万延貨幣改鑄)をおこなって流出を防いだが、貨幣の実質的な価値が下がったことで物価上昇に拍車をかけることになり、庶民の生活は圧迫された。貿易に対する反感が高まり、激しい攘夷運動がおこる一因となった②。

公武合体と尊攘運動

ハリスから通商条約の締結をせまられていた頃、幕府では13代將軍徳川家定に子がいなかったため、將軍継嗣問題がおこった。幕政参画を目指す親藩の越前藩主松平慶永(春嶽)や、有力外様大名の薩摩藩主島津斉彬らは、水戸藩主徳川斉昭の子で一橋家を継いだ徳川慶喜を推し(一橋派)、血統の近い幼年の紀伊藩主徳川慶福を推して現体制を維持しようとする譜代大名ら(南紀派)と対立した。1858(安政5)年、南紀派の彦根藩主井伊直弼が大老に就任すると、通商条約の調印を強行し、慶福を將軍の跡継ぎに決定した(14代將軍徳川家茂)。

条約の違勅調印は孝明天皇の怒りと、一橋派の大名や尊王と攘夷をとる志士たちの強い反発をまねいた。これに対して直弼は強硬な態度で反対派の公家・大名をおさえ、その家臣ら多数を処罰した(安政の大獄)③。このきびしい弾圧に憤激した水戸脱藩の志士らは、1860(万延元)年、直弼を江戸城桜田門外で暗殺した(桜田門外の変)。

桜田門外の変ののち、幕政の中心となった老中安藤信正は、朝廷(公)と幕府(武)の融和をはかる公武合体の政策をとり、孝明天皇の妹和宮を將軍家茂の妻に迎えた。この政略結婚は尊王攘夷④の論者か



桜田門外の変 1860(万延元)
年3月3日、水戸の志士17名と薩摩の志士1名とが、大雪の中で登城する井伊直弼を桜田門外に襲った。直弼が駕籠の外に引き出され、首を討たれようとしている。

(茨城県立図書館蔵)

③ 徳川斉昭・徳川(一橋)慶喜・松平慶永らは隠居・謹慎を命じられ、越前藩士の橋本左内や長州藩士の吉田松陰らは捕らえられて死刑となった。

Q▶ 幕末の将軍には、どのような役割が期待されたのだろうか。

④ 尊王攘夷論は、尊王論と攘夷論とを結びつけた幕末の水戸学思想で、藤田東湖・会沢安ら(→p.214)がその中心であったが、通商条約の違勅調印以後は反幕論へと進んで現実的な政治革新運動となり、これを主張する一派は尊攘派と呼ばれるようになった。

⑤ あわせて幕府は、西洋式軍制の採用、参勤交代制の緩和などをおこなった(文久の改革)。

⑥ この前後に、尊王攘夷を実行しようとした公家の中山忠光と土佐藩士の吉村虎太郎が大和五條の代官所を襲い(天誅組の変)、元福岡藩士の平野国臣らも但馬の生野代官所を襲って氣勢を上げた(生野の変)。

⑦ 朝廷が合議のために有力大名を任命したもの。

ら批判され、信正は1862(文久2)年、江戸城坂下門外で水戸脱藩士らに傷つけられて老中を退いた(坂下門外の変)。こうした事態の中で、朝廷と幕府の双方につながるの深い薩摩藩では、藩主島津忠義の父島津久光が1862(文久2)年、藩兵約1000人を引き連れて上洛し、朝廷に幕政改革を訴え、朝廷から過激派藩士の掃討を命じられた。久光はさらに勅使を奉じて江戸にくんだり、幕府に幕政改革をせまった。幕府は勅使の伝えた朝廷の意向に即して、松平慶永を政事総裁職に、徳川慶喜を将軍後見職に任命し、また京都守護職において会津藩主松平容保をこれに任命するなど、幕政を改めた③。

一方、島津久光が去った京都では、下級藩士が主張する尊王攘夷を藩論とする長州藩が、急進派の公家と結んで朝廷を動かし、将軍を上洛させて攘夷の決行を幕府にせまった。幕府はやむなく、1863(文久3)年5月10日を期して攘夷を決行するよう諸藩に命じた。長州藩は、その日から下関の海峡を通過する諸外国船を砲撃し、攘夷を実行に移した。

長州藩を中心とする尊攘派の動きに対して、薩摩・会津の両藩は1863(文久3)年8月18日、朝廷内の公武合体派の公家とともに朝廷の実権を奪って、長州藩勢力と急進派の公家三条実美らを京都から追放した(八月十八日の政変)⑥。朝廷はその後の政治体制を話し合うため、同年末に徳川慶喜・松平容保・松平慶永・山内豊信(容堂)・伊達宗城を朝議参予⑦に任命し、遅れて島津久光もこれに加えた。しかし、幕府主導で政治を進めたい慶喜と、雄藩連合による政治運営を主張す



四国艦隊による下関砲台の占領 砲台の砲は、長州藩がつくった青銅製の洋式砲。攘夷論では刀での戦いが主張されたが、イギリス軍の記録によれば、イギリス兵の死傷原因は銃砲弾と矢が主で、刀や槍によるものはなかった。

(横浜開港資料館蔵)

① 1864(元治元)年、京都守護職の指揮下にあった近藤勇ら新選組が、尊攘派を京都の旅館池田屋で殺傷した事件。

② 通商条約を締結する際に定めた関税率(平均20%の従価税)を諸外国に有利な一律5%の従量税に改め、また自由貿易をさまたげる諸制限を撤廃した。

③ 薩摩藩は1863(文久3)年に、生麦事件の報復のため鹿児島湾に侵入してきたイギリス軍艦の砲火を浴びており(薩英戦争)、攘夷の不可能なことを認識していた。

る久光の意見は折り合わず、翌年、久光は辞職した。

長州藩は勢力を回復するため、1864(元治元)年、池田屋事件①

を契機に京都に攻めのぼったが、会津・桑名・薩摩などの諸藩の兵に敗れて退いた(禁門の変、または蛤御門の変)。幕府はただちに諸藩を動員して長州征討(第1次)に向かった。また、貿易のさ

またげになる攘夷派に打撃を与える機会をねらっていた列国は、イギリスを中心にフランス・アメリカ・オランダ4国の連合艦隊を編成して下関の砲台を攻撃した(四国艦隊下関砲撃事件)。これらの動きを受けて、長州藩の上層部は藩内の尊攘派を弾圧し、幕府に対し恭順の態度をとった。このため、長州征討の幕府軍は交戦しないまま撤退した。列国はさらに、1865(慶応元)年に兵庫沖まで艦隊を送って圧力をかけ、条約の勅許を勝ちとり、翌年には幕府と交渉して改税約書②に調印させ、貿易上の不平等を拡大させた。

この頃からイギリス公使パークスは、幕府の無力を認識し、天皇を中心とする雄藩連合政権の実現に期待するようになった。薩摩藩は、薩英戦争③の経験からかえってイギリスに接近し、西郷隆盛・大久保利通ら下級藩士の革新派が藩政を掌握した。一方、フランス公使ロッ

幕末の動き(月は陰暦による)

1853. 6	ペリー来航
7	ブチャーチン来航
1854. 3	日米和親条約調印
1856. 7	ハリス着任
1858. 6	日米修好通商条約調印
9	安政の大獄(～59年)
1860. 1	遣米使節出発
3	桜田門外の変
閏3	五品江戸廻送令
1861.10	和宮、將軍家茂へ降嫁
1862. 1	坂下門外の変
8	生麦事件
1863. 5	長州藩、外国船砲撃
7	薩英戦争
8	天誅組の変、八月十八日の政変
10	生野の変
1864. 6	池田屋事件
7	禁門の変、第1次長州征討(～12月)
8	四国艦隊下関砲撃事件
1865. 4	長州再征発令
10	条約勅許
1866. 1	薩長連合
5	改税約書調印
6	第2次長州征討(～8月)
1867. 5	兵庫開港勅許
8	「ええじゃないか」おこる
10	大政奉還、討幕の密勅
12	王政復古の大号令

シユは、あくまで幕府支持の立場をとり、財政的・軍事的援助を続けた。

高杉晋作^{たかすぎしんさく 1839～67}・桂小五郎^{かつら こごろう き 1833～77}（木戸孝允）らの長州藩尊攘派も、下関で四国艦隊に惨敗し、攘夷の不可能を悟った。いったんは幕府に屈伏した長州藩だが、高杉らは先に組織した奇兵隊^{きへいたい}④を率いて1864（元治元）年末に兵をあげて藩の主導権を保守派から奪い返し、藩論^{きやうじゆん}を恭順^{きやうじゆん}から倒幕^{たうぼく}へと転換させ、イギリスに接近して大村益次郎^{おむらます じろう 1824～69}らの指導のもとに軍事力の強化につとめた。

幕府は長州藩に対して、第1次征討の始末として領地の削減などを命じたものの、藩論を一変させた長州藩は容易に応じなかった。そこで幕府は再び長州征討（第2次）を宣言したが、すでに開国進取^{しんしゆ}に転じていた薩摩藩は、ひそかに長州藩を支持する態度をとった。1866（慶応2）年には、土佐藩出身の坂本龍馬^{さかもとりょうま 1835～67}・中岡慎太郎^{なかおかしん たろう 1838～67}らの仲介で薩摩藩は長州藩と軍事同盟の密約を結び（薩長連合^{さつちよう}、または薩長同盟）、反幕府の態度を固めた。このため、第2次長州征討の戦況は幕府軍に不利に展開し、幕府はまもなく、大坂城中に出陣中の將軍徳川家茂^{いえもち}の急死を理由に戦闘を中止した⑤。

2 幕府の滅亡と新政府の発足

幕府の滅亡

徳川家茂のあと15代将軍となった徳川慶喜^{よしのぶ}は、フランスの援助のもとに幕政の立て直しにつとめた。一方、同盟を結んだ薩長両藩は、武力倒幕を決意した。これに対し土佐藩はあくまで公武合体の立場をとり、1867（慶応3）年、藩士の後藤象二郎^{しょう じろう}と坂本龍馬^{やまうちとよしげ}が前藩主の山内豊信^{1838～97}を通じて、将軍徳川慶喜に倒幕派の機先を制して政権を返還することを勧めた⑥。慶喜もこの策を受け入れ、ついに同年10月14日、大政奉還^{たいせいほうかん}の上表^{じやうひやう}を朝廷に提出した。

同じ10月14日には、朝廷内の岩倉具視^{いわくらともみ 1825～83}らと結んだ薩長両藩が、いわゆる討幕^{とうぼく}の密勅^{みつしやく}を手に入れていた。大政奉還の上表で機先を制せられた倒幕派は、12月9日、薩摩藩などの武力を背景に朝廷でクーデタを決行し、王政復古^{おうせいふく}の大号令^{たいこうめい}を発して、天皇を中心とする新政府を樹

④ 高杉晋作^{はんしやう}が藩庁に建議し、1863（文久3）年みずから中心となって、正規の藩兵（正兵^{せいへい}）とは異なり、門閥・身分に関係なく志願による奇兵隊を組織した。長州藩では、そのあとも農商民を加えた諸隊があいついで組織され、これが倒幕運動の軍事力となった。

⑤ 1866（慶応2）年末に孝明天皇が急死した。天皇は攘夷派であったが、過激な倒幕を好まずに公武合体論の立場をとってきたので、天皇の急死は幕府にとって大きな痛手となった。

Q▶ 徳川慶喜は、なぜ大政奉還の上表を提出したのだろうか。

⑥ 将軍からいったん政権を朝廷に返させ、朝廷のもとに徳川家主導の諸藩の連合政権を樹立するという構想であった。

王政復古の大号令

徳川内府①、従前御委任ノ大政返上、將軍職辭退ノ兩条、今般断然聞シメサレ候、抑癸丑②以来未曾有ノ国難、先帝③頻年宸襟ヲ悩マセラル候御次第、衆庶ノ知ル所ニ候、之ニ依リ、叡慮ヲ決セラレ、王政復古、国威挽回ノ御基立テサセラレ候間、自今撰閣、幕府等廢絶、即今先ズ仮ニ総裁、議定、参与ノ三職ヲ置カレ、万機行ハセラルベク、諸事神武創業ノ始メニ原ツキ、縉紳④武弁⑤、堂上⑥、地下⑦ノ別無ク、至当ノ公議ヲ竭シ、天下ト休戚⑧ヲ同ジク遊バサルベキ觀念ニ付キ、各勉勵、旧來驕惰ノ汚習ヲ洗ヒ、尽忠報國ノ誠ヲ以テ、奉公致スベク候事。

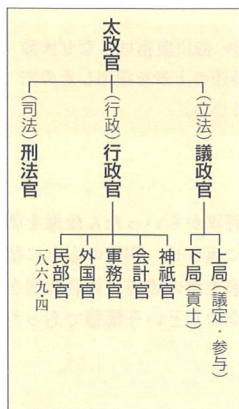
(法令全書)

- ① 内大臣、慶喜。② 一八五三(嘉永六)年。
③ 孝明天皇。④ 公家。⑤ 武家。⑥ 昇殿を許された五位以上の人。⑦ 六位以下の人。
⑧ 喜憂。

① 薩摩藩からは西郷隆盛・大久保利通、土佐藩からは後藤象二郎・福岡孝弟らが任じられ、まもなく長州藩の木戸孝允・広沢真臣がこれに加わった。

② 官軍とも呼ばれた東征軍には、豪農・豪商がみずから組織した義勇軍を率いて参加した。とくに相楽総三らの赤報隊は幕府領での年貢半減を掲げて東山道を東進し、農民の支持を得たが、新政府はのちに相楽らを偽官軍として処刑した。

③ 幕府の崩壊と新政府の成立を、同時代の人々は、政治の一新という意味で御一新と呼び、また中国の古語を当てて維新とも呼んだ。なお、歴史用語としては、黒船来航に始まり、廃藩置県あるいは西南戦争に至る一連の激動の時代を総称して、明治維新と呼んでいる。



政体書による中央官制
(1868年閏4月)

立した。

こうして、260年以上にわたる江戸幕府の歴史に終止符が打たれた。新政府は、將軍はもちろん、朝廷の摂政・関白も廢止して、天皇のもとに新たに総裁・議定・参与の三職をおき、参与に薩摩藩やそのほか有力諸藩を代表する藩士を入れた雄藩連合のかたちをとった①。さらに12月9日夜の三職による小御所会議では、徳川慶喜に内大臣の辭退と朝廷への領地の一部返上(辭官納地)を命じる処分が決定された。これに反発した慶喜は、京都から大坂城に引き上げ、新政府と軍事的に対決することになった。

戊辰戦争と新政府の発足

徳川慶喜を擁する旧幕府側は、1868(明治元)年1月、大坂城から京都に進撃したが、鳥羽・伏見の戦いで新政府軍に敗れ、慶喜は江戸に逃れた。新政府はただちに、慶喜を朝敵として追討する東征軍を発したが②、江戸城は、慶喜の命を受けた勝海舟(義邦)と東征軍参謀西郷隆盛の交渉により、同年4月に無血開城された。さらに東征軍は、奥羽越後藩同盟を結成した東北諸藩の抵抗を打ち破り、9月にはその中心とみられた会津藩の若松城を攻め落とした。翌1869(明治2)年5月には、箱館の五稜郭に立てこもっていた旧幕府海軍の榎本武揚らの軍も降伏し、国内は新政府によってほぼ統一された③。1年半近くにわたったこれらの内戦を戊辰戦争という。

戊辰戦争が進む中で、新政府は政治の刷新を進めた。まず1868(明治元)年1月には、諸外国に対して王政復古と天皇の外交主権掌握を告げて対外関係を整え、ついで3月には、五箇条の誓文を公布して、

読みといてみよう

五榜の掲示を五箇条の誓文(→p.232)と比べてみよう。どのような点で相違がみられるだろうか。また、それはなぜか説明してみよう。

五榜の掲示

- 第一札 定 一人タルモノ五倫ノ道^①ヲ正シクスベキ事。
一 鰥寡^②孤獨^③廢疾^④ノモノヲ憫ムベキ事。
第二札 定 何事ニ由ラズ宜シカラザル事ニ大勢申合せ候ヲ徒党ト唱へ、
徒党シテ強テ願ヒ事^⑤企ルヲ強訴トイヒ、或ハ申合せ居
町居村^⑥ヲ立退キ候ヲ逃散ト申ス、堅ク御法度^⑦タリ。
第三札 定 切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ。
第四札 覚 ……自今以後猥^⑧リニ外国人ヲ殺害シ或ハ不心得ノ所業等
イタシ候モノハ、朝命ニ悖^⑨リ御国難ヲ醸成シ候而已ナラ
ズ、
第五札 覚 ……自然今日ノ形勢ヲ窺^⑩ヒ、猥^⑪リニ士民トモ本国ヲ脱
走イタシ候儀、堅ク差シ留メラレ候。
① 儒教の倫理。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信の五つ。② 配
偶者をなくした人。③ 親や子をなくして身寄りのない人。④ 身体障害者・病人。⑤
居住している町村。⑥ 御禁制。⑦ 天皇の命令に背く。⑧ ひそかに様子を窺う。
(法令全書)

五榜の掲示の高札 五榜の掲示は5枚の高札からなり、写真はそのうちの第1札。

(明治大学博物館蔵)

五箇条の誓文の草案 初め諸侯会盟の議事規則として、参与由利公正・福岡孝弟らによって起草された。のち戸孝允が国としての進むべき基本方針を示す条文につくりかえ、五箇条の誓文となった。草案では第1条に「列侯会議ヲ興シ」とあるが、成案では「広く会議ヲ興シ」と改められた。(宮内庁書 慶 部蔵)



公議世論の尊重と開国和親など新政府の国策の基本を示し、天皇が公卿・諸侯・もろもろの官を率いて神々に誓約する形式をとって天皇親政を強調した。

ついで同年 閏 4 月には、政体書を制定して政府の組織を整えた。

- すなわち、国家権力を太政官と呼ぶ中央政府に集め、これにアメリカ合衆国憲法を参考に三権分立制を取り入れ、高級官吏を4年ごとに互選で交代させるなど、新たな政治体制を目指した。また政府は関東鎮圧とともに、7月に江戸を東京と改め、8月には明治天皇が即位の礼をあげた。9月に年号を明治と改元して一世一元の制を採用し、翌1869(明治2)年には京都から東京に首都を移した。

一方で政府は、五箇条の誓文公布の翌日、全国の民衆に向けて五

④ 実際には、太政官における立法と行政との区別は明瞭ではなく、官吏の互選も1回実施されただけで終わった。立法機関とされた議政官は当初、議定・参与からなる上局と、各府県・各藩選出の貢士からなる下局から構成された。下局は翌年に公議所となり、さらに集議院へと再編成された。

の^{けいじ}揭示^{くんしん ふし}を掲げた。それは君臣・父子・夫婦間の^{じゆきやう}儒教的^{とどう ごうそ}道德を説き、^{とどう}徒党・強訴^{ごうそ}やキリスト教を改めて厳禁するなど、旧幕府の民衆に対する政策をそのまま引き継いでいた。

幕末社会の動揺と変革

開国にともなう物価上昇や政局をめぐる抗争は、社会不安を増大させた。1866

Q▶ 世直し一揆や「ええじゃないか」の発生、御蔭参りの流行には、どのような社会的背景があったのだろうか。

(^{けいおう}慶応2)年には^{こんきやう}困窮した農民たちが^{よなお}世直しを叫んで一揆をおこし(^せ世直し一揆)、翌年以降も続発した。米価騰貴に苦しむ大坂や江戸の民衆は大規模な打ちこわしをおこなった。1867(^{とうかい}慶応3)年、東海・畿内^{きない}一帯の民衆のあいだでは、熱狂的な「ええじゃないか」の集団乱舞が発生し、この「世直し」を期待した民衆運動は、幕府の支配秩序を一時混乱におとし入れた。

また、大和に^{やまと てんり}天理教、備前に^{び ぜん}黒住教、備中に^{くろずみ}金光教など、のちに^{びっちやう}急教^{こんこう}派神道と呼ばれる民衆宗教がすでに生まれていたが、この頃に急激に普及した。これとともに伊勢神宮への^{い せ じんぐう}御蔭参り^{お かげまい}も流行し、時代の転換期の行き詰まった世相から救われたいという民衆の願いにこたえた。王政復古の^{おうせいふつ}大号令^こでは、民衆を生活苦から救うことが目指されて

おり、こうした民衆の要求への対応は、新政府の課題として引き継がれていった。

一方、対外的危機にさらされたことで、かねてより国内で広まりつつあった実学志向はさらに強まり、欧米諸国の技術や学問に対する関心が高まった。ペリー来航の前後から、幕府や諸藩は欧米諸国の技術を受け入れて近代化をはかろうとした。

「ええじゃないか」 1867(慶応3)年の夏から翌年にかけて、東海道筋から京都・大坂を中心とする地域で、伊勢神宮の御札などがふってきたのを契機に、多くの人々を巻き込んだ熱狂的乱舞が流行した。(三重県総合博物館蔵)



当初の課題は砲台^{はんしゃろ}や反射炉^{はんせん}の建設、大砲の製造、洋式帆船の建造など、欧米では産業革命前の段階の軍事技術を導入することであり、幕府では代官江川太郎左衛門^{えがわたろうざえもん たんあん}（坦庵）^{→ p.213}が中心となって取り組んだ。開国後、幕府は江戸に蕃書調所^{ばんしよしらべしよ}^{→ p.215注①}を設けて、洋学の教授と外交文書の翻訳などに当たらせ、講武所で洋式砲術を含む武芸を教え、長崎ではオランダ人による海軍伝習^{でんしゅう}を始めた。その一環として汽船の機関を製造・修理できる工作機械を設備した造船所（長崎製鉄所）が建設され、はじめて産業革命後の機械製造技術が伝えられた。1860^{まんえん}（万延元）年^{にちべい}の日米修好通商条約^{しゅうこう びじゅん}の批准書^{かうふしよ}交換に際して、勝海舟^{かつかいしゅう}ら海軍伝習を受けた乗組員^{かんりんまる}^{→ p.223}が咸臨丸で太平洋を横断したのをはじめとして、幕府のほか薩摩・長州^{さつ ちようしゅう}などの諸藩も海外に留学生を派遣した^②。洋学学習者や留学生たちは軍事技術と医学の導入を目的としていたが、西洋文明への理解が深まるにつれ、科学・技術・政治・法制・経済など、様々な分野に関心を広げていった。

慶応年間（1865～68年）には、幕府がフランスの顧問団^{こもんだん}をまねき、横須賀^{すか}に造船所（横須賀製鉄所）の建設を進め、新式の陸軍^{りくぐん}を設けて訓練した。このほか、開港場の横浜には外国人宣教師^{せんきょうし}や新聞記者が来日し、彼らを通して欧米の文化が紹介された。その宣教師の中には、アメリカ人ヘボン^{Hepburn}^{1815～1911}やフルベッキ^{Verbeck}^{1830～98}のように英学^{えいがく}の教授を通じて、積極的に欧米の文化を日本人に伝える者も現れた。こうして攘夷^{じょうい}の考えはしだいに改められ、むしろ欧米をみならって近代化を進めるべきだという声が強まっていった。新政府では幕末^{ばくまつ}に学問・技術を磨いた者たちを要職に登用しつつ、戊辰戦争以後、本格的な改革に乗り出していった。

①のちに洋書調所^{ようしよしらべしよ}、ついで開成所^{かいせいじよ}に発展した。また、医学^{しゆとうじよ}では種痘所^{しゆとうじよ}（のちの医学所）が設けられた。

②洋書調所の教官西周・津田真道はオランダに留学し、福沢諭吉は幕府の使節に従ってアメリカ・ヨーロッパにおもむいた。長州藩から伊藤博文・井上馨^{かおる}らが、薩摩藩から森有礼^{ありのり}らがイギリスに留学した。

第11章のまとめ

- 問1 幕末の動乱と新たな政治体制の模索には、日本の近代化においてどのような意味があったのだろうか。
- 問2 幕末から近代への変化をふまえて、その後の日本国内や国際関係の展開について、問いを表現してみよう。
- 問3 国際社会や国内の政治・経済・社会、またその担い手などの観点から、近代・現代の特徴について、近世や現在とも比較して、問いを表現してみよう。

五箇条の誓文と国是

近現代は、政権によって国家のとるべき方向(国是)が広く示され、またそれが国内で幅広く議論される時代であった。そして、それを示され、また議論する人々の範囲の拡大が進んでいった。明治政府が最初に示した「国是」である五箇条の誓文(→p.228)とその扱われ方を示す資料を読んで、近代・現代の歴史の流れについて考察してみよう。

五箇条の誓文

一 広く会議ヲ興シ万機^①公論ニ決スベシ
一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸^②ヲ行フベシ
一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦ザラシメン事ヲ要ス
一 旧来ノ陋習^③ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基^④ヲ振起スベシ
我國未曾有ノ改革ヲ為ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ。
(『法令全書』)

①すべての重要な政務。②国家をおさめる施策。③悪習。④皇国の基。

宸翰

往昔、列祖^①万機ヲ親ラシ、不臣ノモノアレバ、自ラ將トシテコレヲ征シ玉ヒ、朝廷ノ政、総テ簡易ニシテ、如此尊重ナラザルユヘ、君臣相親シミテ、上下相愛シ、徳沢^②天下ニ洽ク国威海外ニ輝キシナリ。然ルニ近來宇内^③大ニ開ケ、各国四方に相雄飛スルノ時ニ當リ、独我邦ノミ世界ノ形勢ニ疎ク、旧習ヲ固守シ、一新ノ效ヲ計ラズ、朕徒ラニ九重^④中ニ安居シ、一日ノ安キヲ偷シ百年ノ憂ヲ忘ル、トキハ、遂ニ各国ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ、下ハ億兆^⑤ヲ苦シメン事ヲ恐ル、故ニ、朕茲ニ百官諸侯ト広ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ継述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ズ、親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニ八万里ノ波濤ヲ拓開シ、国威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置ンコトヲ欲ス。……汝億兆能ク、朕ガ志ヲ体認シ相率テ私見ヲ去リ公議^⑥ヲ採リ、朕ガ業ヲ助テ神州ヲ保全シ、列聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメバ、生前ノ幸甚ナラン。
(『法令全書』)

①代々の祖先。②恵み。恩沢。③世界。④皇居。宮中。⑤万民。⑥公平な議論。また、みなが納得する議論。

幕府を倒した新政府は王政復古、すなわち武士にゆだねていた権力を朝廷に取り戻し、本来のあり方に戻す、ということで権力の正統性を主張した。しかし、外国との交流が始まった中で、具体的にどのような方針をとるのか、伝統から明らかなわけではなかった。そこで、天皇が神々に誓う五箇条の誓文と、国民に天皇の意志を説明する宸翰とが示された。

- ▶ 誓文の内容はどのようなものだろうか。
- ▶ 天皇の誓いのあとには、総裁、公卿、諸侯がこれに賛成して決死の覚悟で努力するという誓いが記され、それぞれが署名した。そこからどのようなことがわかるだろうか。

1880(明治13)年に国会期成同盟が作成した国会開設請願書(→p.248)は、五箇条を全文引用し、そのすべてが国会開設か立憲政体の樹立に結びつくとして論じた。このように、自由民権運動の盛り上がる中で、誓文は民権派の主張の根拠としてよく用いられた。

- ▶ なぜ、民権派が五箇条の誓文をさかんに引用したのだろうか。
- ▶ 国会開設請願書での五箇条の解釈を確認してみよう。

1890(明治23)年、第1回帝国議会の衆議院で予算の削減を求められたあと、内閣総理大臣山県有朋は史料(→p.233上史料)のような演説をおこなった。これまで、公式に「国是」と呼ばれたのは五箇条の誓文のみであったが、ここでは「国是」にやや異なった意味が与えられている。

- ▶ ここでいう「国是」は、五箇条と何が共通して何が異なっているのだろうか。
- ▶ なぜ、山県はそのような「国是」を述べたのだろうか。

1943(昭和18)年の国民学校国定教科書『初等科国史 下』では「天皇は、諸政を一新し国力を充実して、皇威を世界にかがやかす思召しから、まづ、政治の根本方針をお立てになりました。」として五箇条が紹介され、条文の意味については全く説明されていない。引用部の説明は誓文と同時に発表された宸翰の言葉によっており、この時期の誓文についての叙述ではこのように宸翰を重視して解説するのが一般的であった。

- ▶ なぜ、このような紹介のしかたがなされたのだろうか。
- ▶ 「皇威を世界にかがやかす」とはどのような意味だろうか。宸翰での使われ方と、この時代の受け止められ方を考えてみよう。

連合国軍による占領下で現行憲法の前案の作成が進められていた1946(昭和21)年の元旦、天皇の「人間宣言」(→p.327)といわれた詔書が発表された。この詔書には内閣総理大臣はじめ、各大臣が連署して、日本国憲法の公布で新たな国のあり方が示されるまでの短いあいだではあったが、誓文は再び国の基本方針として掲げられた。

- ▶ なぜこの詔書で五箇条の誓文が掲げられたのであろうか。

日本国憲法制定後には、五箇条の誓文は五榜の掲示(→p.229)とあわせて紹介されるのが一般的である。五榜の掲示は幕府の対民衆政策を引き継ぐ要素が強い。

- ▶ なぜ、五榜の掲示が合わせて取り上げられるのであろうか。

五箇条の誓文の扱われ方から、近代・現代の歴史の流れをどのように説明することができるだろうか。かわったこととかわらなかったことを考えながら仮説を立ててみよう。

山県有朋の演説

維新の始めに当りまして、詔勅を以て開国の主義を明に定められたる以来、政府は一意にその開明の進歩を謀り、武備を張り、文物を修め、旧来の陋習を破って、百般の制度を新にいたしました。ござります。内には国民の智識を進め、其の幸福を増進することを務め、外には各国と交際を厚くいたしまして、共に対立することを望んで来たものでござります。此の二十四年の間、日一日も変更することのないものは即国是である。而して上下相挙げて希望を共にするものは即此の国是である。

(『官報』)

人間宣言

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、
一、広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ
一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス
一、旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ
朕旨ニ公明正大、又何ヲ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、旧来ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民拳ゲテ平和主義ニ徹シ、教養豊カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ図リ、新日本ヲ建設スベシ。……
惟フニ長キニ亘レル戦争ノ敗北ニ終リタル結果、我

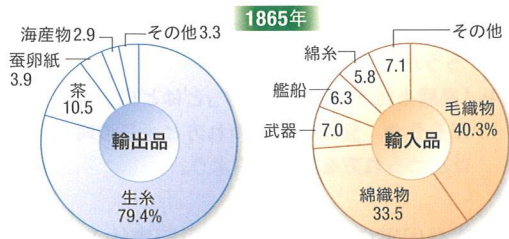
国民ハ動モスレバ焦躁ニ流シ、失意ノ淵ニ沈淪セントスルノ傾キアリ。詭激ノ風漸ク長ジテ道義ノ念頗ル衰ヘ、為ニ思想混乱ノ兆アルハ洵ニ深憂ニ堪ヘズ。
然レドモ朕ハ爾等國民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分クタント欲ス。朕ト爾等國民トノ間ノ紐帶ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ。……
一年ノ計ハ年頭ニ在リ、朕ハ朕ノ信頼スル國民ガ朕ト其ノ心ヲ一ニシテ、自ラ奮ヒ自ラ励マシ、以テ此ノ大業ヲ成就センコトヲ庶幾フ。

(『官報』)

① 天子のお考え。ここでは明治天皇のお考え。
② 過激。
③ 喜びと悲しみ。
④ 生身の神。

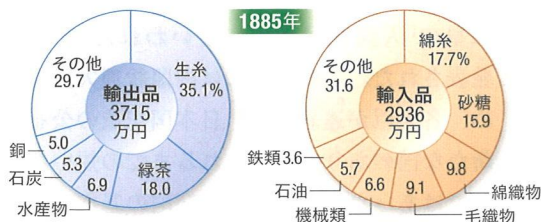
貿易の変遷からみる 日本の近代・現代

1859年の開港により本格的に貿易が始まった。国際価格と、国内産業の状態を反映する国内価格との差によって輸出入品が決まり、輸出産業は成長した。輸入超過は金銀の流出をもたらして国を貧しくし、外国からの借り入れでこれをおぎなうことは、国の独立を危うくすると考えられた。そこで、輸出産業の振興と、輸入品の国産化をはかる経済政策がとられた。輸出入については、関税を課すためにその数量が記録され、経済の状況を示す統計として利用されてきた。これにより、それぞれの時期の産業の状況と経済政策の課題を考えてみよう。



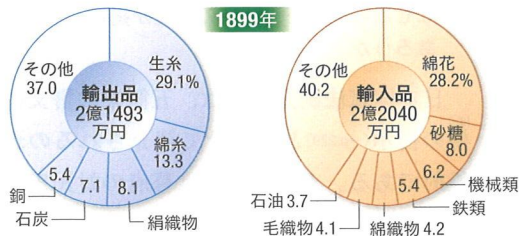
(石井孝『幕末貿易史の研究』より作成)

幕末1865(慶応元)年の輸出は生糸が中心で、茶がこれに続く。輸入では織物が大半を占める。欧米の産業革命の影響がはっきりとみられる。



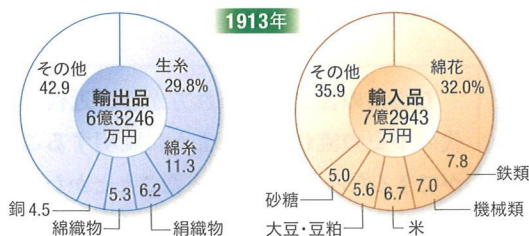
(東洋経済新報社編『日本貿易精覧』より作成)

1885(明治18)年になると、輸入の首位が綿糸になる。これは、国内のどのような変化を反映しているのだろうか。また機械とともに、砂糖や石油の輸入が増えているのは何を意味しているのだろうか。



(東洋経済新報社編『日本貿易精覧』より作成)

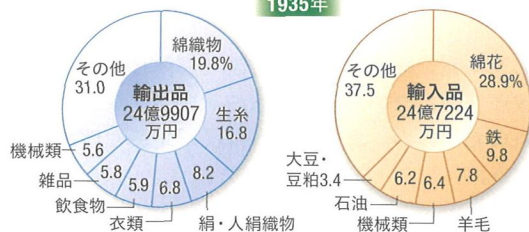
1899(明治32)年には綿糸が輸出品に転じ、その原料である綿花が輸入品の首位になっている。これは、何を意味しているのだろうか。



(東洋経済新報社編『日本貿易精覧』より作成)

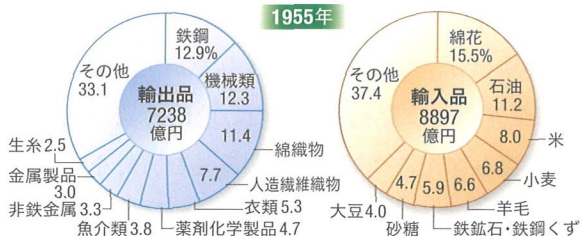
1913(大正2)年、第一次世界大戦直前には輸入品に米がみえる、グラフには表れないが、明治の半ばまで米は輸出されることもあった。どうして輸出品から輸入品にか変わったのだろうか。

1935年



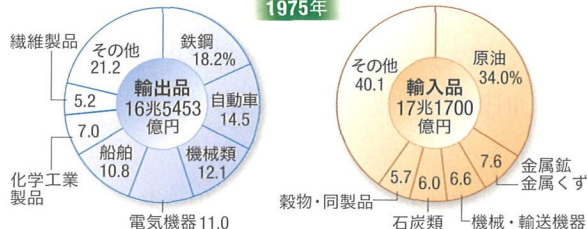
(大蔵省編『日本外国貿易年表』より作成)

1955年



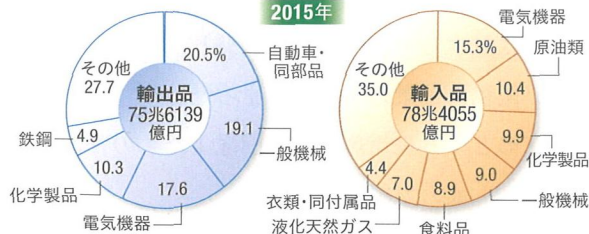
(経済企画庁『年次経済報告』より作成)

1975年



(財務省『日本貿易年表』より作成)

2015年



(総務省統計局『日本の統計』などより作成)

1935(昭和10)年になると、綿織物が生糸にかわって輸出の首位になるが、ほかの織物も増加している。衣類や雑品(雑貨)の輸出が多いこともあわせ、当時の日本の産業の国際的な強みはどこにあったのか考えてみよう。機械類の輸出が始まる一方で、輸入も続き、また鉄や石油の輸入も比率を高めた。綿花のおもな輸入先がイギリス領インドで、生糸の輸出先がアメリカ合衆国であったこととあわせ、これらの国々との関係の悪化や戦争が経済・社会におよぼした影響を考えよう。

1955(昭和30)年には生糸の輸出や、綿花輸入と綿織物輸出という戦前の繊維産業の復活もみられるが、鉄鋼や船舶を含む機械が輸出の上位にあり、産業構造の変化がうかがえる。その背景や意味を考えてみよう。

1975(昭和50)年には重化学工業化が進展しているが、繊維製品の輸出も続き、燃料や原料、食料を輸入して工業製品を輸出する工業国の姿がみえる。明治以来目立っていた繊維製品の輸出は5%である。

2015(平成27)年には通信機器を含む電気機器や医薬品を含む化学製品、一般機械も輸入されるようになっており、同一品目内での国際分業の進展が示されている。

以上を通じて、近代・現代の日本の産業のあり方や課題がどのように変化していったかを見通し、その中でどの時期の変化がもっとも大きな意味をもったかを自分なりに考え、そう考える理由を含めて仮説として述べてみよう。